

彭際清『華嚴念仏三昧論』について

中 村 薫

今回は、特に彭際清の伝記、著書を通して、彼の念仏三昧観の特徴ならびに背景について考察してみたいと思う。

先ず、『華嚴念仏三昧論』の著者彭際清（彭紹升）は、字を允初といい、乾隆五年（一七四〇）に長州に生まれ、嘉慶元年（一七九六）に亡くなるまで、清末の居士仏教の代表者として君臨していた。故に尺木居士ともいわれ、また、自ずからは知学帰子とも号している。

彭際清の伝記の詳細については、彼自身の著『居士伝』巻五十六の「知帰子伝」を参考にするのが適当かと思われる。

元々、清末当時の居士と称す人々は、乾隆帝の仏教教団を社会から遊離させる方針を採用したためであろうか、何れも儒教、あるいは道教より転じて、仏教の道に入った人が多いようである。彭際清の場合も例外ではなく、『居士伝』に

知帰子世為儒。其父兄皆以文学官於朝。知帰子年未冠用儒

言取科第。（乾隆乙・22・5・505右・下）

とあるが如く、幼少より儒教を真剣に学んでいたことが知られる。父の名を啓豊といい、彼は第三子であった。父兄が皆な文学を以って官仕となつて朝廷に仕えていたように、彼もまた、儒教を学ぶことによつて科擧の試験を受け、見事に冠礼以前に進士の位となつたのである。

斯かる彭際清も、自ずから「此非吾務也」と、自身の生き方そのものに疑念を抱くようになり、遂に「吾未明吾心」と自省し、以後三年程、道家の修練の術を習う訳である。その当時の彼の思想内容については『一乗決疑論』に

從宋明諸先輩論學書。窺尋端緒。稍稍識孔顏學派。而于明道象山陽明梁谿四先生。云々（乾隆一・2・9・1・75右・上）

とあるが如く、彼は深く程明道・陸象山・王陽明・高梁谿の思想の影響を受けていたようである。しかし、あまり功利もなく、その後仏教書を読む機会に恵まれることになるのである。その時の状況を『居士伝』で次の如く述べている。

其後読_レ仏書一心開。以為道之所_レ帰在_レ是矣。聞西方有_二無量壽仏_一放_二大光明_一接_二引五濁衆生_一往_二生淨土_一。意恠然慕之曰面_レ西而拜焉。(正統乙・22・5・505右・下)

時に彭際清三十歳のことである。以後、総べての官仕の職を辞退し、ひたすら仏教の求道生活に入るのである。

二

次に、彭際清の著書の内容の一々の説明は略すが、その著書名のみ(年代順)挙げれば以下の如くである。

(一)、乾隆四十年(一七七五)・彭際清三十五歳。

①『居士伝』五十六卷(正統乙・22・5) ②『無量寿経起信論』三卷・浄土三論第一(正統一・32・3) ③『観無量寿仏経約論』一卷・浄土三論第二(正統一・33・1) ④『阿弥陀経約論』一卷・浄土論第三(正統一・33・4)

(二)、乾隆四十一年(一七七六)・同 三十六歳。

⑤『二林唱和詩』一卷(正統二・14・4)

(三)、乾隆四十四年(一七七九)・同 三十九歳。

⑥『観河集節鈔』一卷(正統二・14・4) ⑦『測海集節鈔』(正統二・14・4)

(四)、乾隆四十五年(一七八〇)・同 四十歳。

⑧『一乗決疑論』一卷(正統二・9・1) ⑨『善女人伝』二卷(正統乙・23・1)

彭際清『華嚴念仏三昧論』について(中村)

(五)、乾隆四十八年(一七八三)・同 四十三歳。

⑩『華嚴念仏三昧論』一卷(正統二・9・1) ⑪『体仁要

術』一卷(正統二・12・2) ⑫『浄土聖賢録』九卷(正統乙・8・2)

(六)、乾隆五十七年(一七九二)・同 五十二歳。

⑬『省菴法師語録』二卷(正統二・14・4) ⑭『重訂西方公

三

一体、『華嚴経』に於ける念仏三昧の最も詳細に説かれる箇所は「入法界品」に出する第一善知識功德雲比丘の説く二十一種の念仏三昧である。「入法界品」では、その後、逐次、第二善知識海雲比丘により念法が、第三善知識善住比丘により念僧がそれぞれ説かれることになるのである。故にここで説かれる念仏とは三帰依中の念仏をいうのであって、従つて、念仏三昧の念仏とは、実践的に諸仏を念ずることである。ところが、浄土教という念仏とは、具体的に南無阿弥陀仏と称名することである。試みに、浄土教の師、道綽・善導もそれぞれ『安樂集』巻下・『観経四帖疏玄義分』に於いて、念仏三昧を明かすのに『華嚴経』の文を取意して述べていることは注目される(詳細については拙稿「華嚴浄土蔵」(一)を参照されし)

それでは、彭際清はこの華嚴の念仏三昧を如何に理解しているのだろうか。今、具体的に『華嚴念仏三昧論』について見ていく前に、少し王文治（一七三〇～一八〇二）撰の「華嚴念仏三昧論叙」を見てみたいと思う。

先ず、王文治は『大乘起信論』の覺・不覺の説により、念仏の語義を分析している。即ち

念者不覺也。仏者覺也。念仏者以覺撰不覺也。念仏三昧者以覺撰不覺。入于正覺海也。（記統一・二・九・一・84左・上）と述べ、続いて『華嚴經』には、諸仏の一切三昧が具足されているが、就中、念仏三昧こそ一切の三昧中の王であるというのである。更に

知帰居士修念仏三昧者十數年。而又于華嚴義海。一門深入。頃過鎮江。出所著華嚴念仏三昧論見示。拳清涼裏栢恒河沙字數。而包舉以五六千言。覺疏鈔合論非多。此論非少。且当栢著論時。行願全品未至此方。故于他方淨土。輒生別異。此品全出。必待此論而義始完其殆阿弥陀仏神力加被。俾居士隨宜說法。広導羣品者乎。竊謂念仏修淨土者。煩惱惡血。為清淨法乳也。（記統一・二・九・一・84左・上）

と述べているを見る。

王文治によれば、彭際清は『華嚴念仏三昧論』を著す十數年前より、念仏三昧を修していたという。元より、彭際清の淨土教の正依經を顕せば『淨土三經論』であろう。斯かる淨

土念仏の根本義を顕した『淨土三經論』を著したのが乾隆四十年（一七七五）であるから、この『華嚴念仏三昧論』より八年程前の作ということになる。そのことは、既に『淨土三經論』によって明らかにされた淨土教の要義を、更に実践的意味に於いて闡明に顯さんとしたものが『華嚴念仏三昧論』と考えられる。つまり、その後記をみると

是論作于乾隆四十八年冬十二月。既成。汪子大紳評之曰。此淨土正因。華嚴正信也。…略…時乾隆五十六年六月晦際清記（記統一・二・九・一・89右・上）

とあるが如く、乾隆四十八年（一七八三年十二月）に制作し、乾隆五十六年（一七九一）に再録したものである、今、『華嚴念仏三昧論』を制作した乾隆四十八年を中心に見てみると、その十年程前の念仏三昧を修せんとした頃に『淨土三經論』を著し、後の十年程の再録時には、同時に『念仏警策』・『重訂西方公掬』等を著している。

以上の点より、念仏を中心にして彭際清の思想的変遷（著書により）を見てみると、『淨土三經』↓『華嚴經』↓華嚴淨土教ということがいえよう。即ち、彼の淨土教の完成的特性は、『華嚴經』を正所依經として、念仏の一法を立て、その念仏を以って全仏教の統合を試みた点にあるといえる。

ところで、この『華嚴念仏三昧論』は、大日本統藏經に於いて十頁ならずで、例えば、澄觀（七三八～八三八）・李通玄

四

(六三五・七三〇)の疏鈔や合論と比較した場合、大変少部なものである。しかし、今は、単に論の多少が問題ではなく、

ただ、李通玄が合論を著した時は、残念ながら『入不思議解脱境界普賢行願品』(四十華嚴)の翻訳(貞元十四年・七九八年に翻訳)は成されていなかったのである。その点に於いて、

両者の浄土の概念についても別異を生じているが、今、全品が翻訳された上で見てみると、そこでは専ら殆んど阿弥陀仏神力の加被の義が説かれている。故に彭際清は、斯かる説法に随って広く念仏の義を宣布せんとしたのである。即ち、念仏により浄土を修するということは、煩惱の悪血を転じて清浄なる法乳と為すことを意味するのである。そして、更に

夫念仏無差別。而三昧有淺深。三昧之淺深。念仏之差別也。(記統一・2・9・1・84左・下)

と、念仏は飽くまでも無差別であるが、三昧には浅深があり、その三昧の浅深はそのまま念仏の差別となると述べ、更に

文治自弱冠即喜修禪。四十以後。始兼修念仏。比年来以念仏為禪。復以禪念仏。禪淨並運。(記統一・2・9・1・84左・下)

と、念仏と禪との一致を説き、自身に於いて「幸有_レ三_レ教我_二と告白しているをみる。

さて、王文治の序にして、斯くまでいわせしめている『華嚴念仏三昧論』とは如何なる内容を有した書なのか。以下少しくその概略を述べてみることにする。

彭際清『華嚴念仏三昧論』について(中 村)

『論』に次の如く示されている。

念仏法門。諸經廣讚。約其總貫。略有二塗。一普念。一專念。

(記統一・2・9・1・84左・下)

彭際清によれば、念仏の法門は広く諸經の間で讃嘆されているが、それを略せば二途に分けられるという。一は多仏普念にして、一は一仏專念である。前者は『觀仏三昧海經』(大正十五卷所収)『大方広如來不思議境界經』(同十卷)等の所説であり、後者は『藥師琉璃光如來本願功德經』(同十四卷)『阿閼仏国經』(同十一卷)『無量壽經』(同十二卷)等の法門である。そして、この二法門を相即融合する所の教こそが、他でもない一多相入・主伴交融・即自即他・亦專亦普の義を説く『華嚴經』というのである。彼は次の如く五義を以てその意義を明かさんとするのである。

(一)、念仏法身直指衆生自性門。(二)、念仏功德出生諸仏報化門。(三)、念仏名字成就最勝方便門。(四)、念毗盧那仏頓入華嚴法界門。(五)、念極樂世界阿弥陀仏圓滿普賢大願門。

以上、一々の門の内容の考察は次回に譲ることとし、今回は彭際清の『華嚴念仏三昧論』選述の意義と、その背景について述べたに過ぎない。(参考文献略)

(同朋大学講師)